

暗躍者は爪を立てる

町田第二小学校 六年

桜井 文香 さくらい ふみか

「十時をむかえてすぐ、ターゲットがやってくる。赤いロングスカートの女と、白地に青いたてじま模様の服の男だ。狙い目なのはやはり女だと推測している。あと五分ほどで時間だ」

「了解」

「爪は手入れしておけ」

「了解」

音声が止まる。私は、ふうと一息ついて、今いる高台から辺りを見渡す。私の付近にはだれもないようだ。ここなら、少しくらい気を抜いてもいいだろう。

私は――あまり深くまでは語れないのだが――今の日本人、いや、世界中の人類に足りない。良い意味なのか分からないが、私はその部隊の数少ない貴重なメンバーらしい。確かに、先ほど指令を出していたU（仮名）の仕入れた情報だと、部隊の中でも、瞬発力と跳躍力は私が堂々のトップ成績なんだとか・・・。

でも、家族にはもっと足の速いやつだっているし、跳躍なんて私は苦手意識すら持っている。部隊の仲間達と会ったことはないが、にぶいやつらなんだろうと思っている。もしこれをU（仮名）に言ったら、幹部に密告されるだろうから、心の中にとどめておく。

「おっ、来たな」

話し声が遠くから聞こえる。ざっと二十人ほど。ターゲットの二人をその中から探し出さなくてはいけない。背伸びをして、様子をうかがう。

人の姿が見えてきた。子供もいる。

（赤いロングスカートに、白地に青いたてじまの服……）

あっ、いた。あの二人だ。

こちらに向かって歩いてくる。

ラブラブな様子はない。初デートといったところだろう。仕事しがいがある。私は先ほどからずっといた高台から、下に降りて、だんだんと近くに歩み寄る二人を見る。女の方はこちらを見つめ返し、男になにかささやいている。

私は心の中でつぶやく。いつもターゲットに対してかけている言葉を。

東京町田・中ロータリークラブ会長賞
櫻井文香「暗躍者は爪を立てる」

「“愛”を生み出す掛け橋になっていきますように」

そして私は、ターゲットの女のロングスカートに飛びかかった。

「キャア!!」

「どうした!!」

「リスがこっちを見つめてきてて、かわいいなあと思って近づいたら、スカートに飛びかかってきたの……」

「えっ、大丈夫！けがしてない？」

「うん。スカートにリスの爪のあとがついちちゃったけど、ありがとう。気を使ってくれて」

「そう、なら良かった。それにしても、町田さんって、こういう所好きなんですね。少し意外でした」

「こちらへんで育ったからね。小動物、好きだし。いつもながめるだけなんだけどね」

「初デートで来るくらいだし、好きなんだろうなあって。僕も動物好きなんです。しかもリスが大好き！こないいスポット教えてくれてありがとうございます」

「どういたしまして。……でさあ、石倉くんって、今日の午後も空いてる？」

「……？はい」

「昼ごはんどこかで食べて、またここ来ない？一緒に、リスにごはんあげたいなあって思ってた」

「え、いいですね。行きましょう！リスって何食べるんでしょう？楽しみです！」

「ヒマワリの種を食べると思うよ。あと、わたしにはタメ口ね、今から。一応……付き合っているし」

「は、はい！あ、間違えた、うん！」

「よし、じゃあ決まり！リスの爪には注意だよ！」

ターゲットの二人は、昼ごろに一度ここを去ったが、しばらくしてまたもどってきた。先ほどより仲が良さそうに見える。私はそれを確認し、物影にかくれる。そして「任務成功」とU（仮名）に報告し、私は爪の手入れを始める。次なる任務のために。

東京町田・中ロータリークラブ会長賞
櫻井文香「暗躍者は爪を立てる」

審 査 員 講 評

ギャップが最高です。前半は一貫してハードボイルドな雰
囲気を作り上げ、その後反転して一気に微笑ましい展開で
畳み掛けているところが楽しいと思いました。タイトルも
センス抜群。後半がほとんど会話で構成されていることで
展開が客観的に転がり、最後まであくまでリス目線で終わ
るところもよかったです。

—— 藤岡 みなみ